EUROPE

京都
青樹社
版

杉本駿彦＊第三詩集

An anthology completed by **Toshihiko Sugimoto** *author of 'Le chien Pompéien'*

Eine Geographische Untersuchung Eines Dichters

Kyoto **Seijusha** *Limited*

城越健次郎義

著者

EUROPE

Eine
Geographische Untersuchung
Eines Dichters

von

Toshihiko Sugimoto

Verlag von Seijusha

MCMXXXIV

Kioto

A mes parents

European Russia

Ural

その頃甚しい嫌悪の情に僕はゐた。假初の病にも絶えず强迫觀念が僕を捉へた。溫和な海風のあひだに顏色は次第に白けて行つた。終に、この地を去るより他に方法が見出せなくなつたのである。事實、生活に於ても枯草菌のごとき檢鏡も亦戰慄させるのであつた。尙わるい事に僕はイソルデの杯を誤つて飲んだ。

自己拋棄をなさんとする時、反作用は微妙な働きをす

る。落下體に加はる法則 $s=\frac{1}{2}gt^2$ により支配されつつある人間にあつても、瞬間の後悔はあるだらう。生甲斐ある明日の形成のために、僕は科學を選んだのである。それ故正に消えがての蠟燭にあたらしく酸素を與へられたごとく、生命は火のやうに輝き一つの止揚をなした。

日又日の來往によつて生命は心の隅迄も滿ちた。未來の經驗に備へる眼は、トレイ・デュニオンの飛來を知り徒らに死なんよりは己れが創案をもつて分析と綜合法を總てに加へよと、盟つたのであつた。其時以後女人を見る視點は訂正されヴァルカンの鎚に鍛えられた僕の精神は、海より離れる時代のアフロディテを認識した。

併し悲むべきことには、ウラル南方に姿を隱してしまつた。由來、ウラルは北・中央・南に分れてゐるが、この暗い森林ウラルからは首都モスクヴにむけて報告され次いで、モスクヴから全世界にむかつて、電波が送られたのである。

ルブリ・ドレ・メヌマン三氏のトレイ・デュニオン第二號はモスクヴ通過後、タニーバ河とビエラヤ河との合流點ウフア市附近において十二日午前十時墜落、機體は大破、乘組員中二名は即死した　ウフア市はウラルの天險を目前に控

へたところ……

何時かは現はれるであらう。透明な空を縫ふて進む銀色の姿勢よ！　莞爾たる着陸こそ、古代希臘人達のあひだに約束されたことの成つた日であらう。飛びあがれ。飛びあがれ。僕の手に記錄をさせよ。確實こそ千萬の言葉よりも尙尊いものだ。

White Sea

私は二大河 *Pechora* • *Dvina* を夢に持ち、それを敎へて吳れた父親の面輪を流れのあひだに彷彿させることも知つてゐました。新しく竹中氏を知るに及んで *Onega* がその姿を現はしてきました。極北ツンドラ地帶が濕地記號と一緒に季節毎に私の胸に呼びかけるのでした。

ウィリアムスの著書は *Kora in Hell* で *Kola in Hell* は半島の冷寒です。ほんの僅な一字が、私を北に捩曲げたので

した。これは言語と聯想の結果からか。曾て黄英の名を聊齋志異で見たときも同様でした。更にアニュータを讀んだ時『グリゴリイ！　サモワァルを沸せ！』の言葉は悲しさうな表情をしたチエホフに私を近附けるのでした。

白と群青との調和を思ふこと切な時、ムルマン海岸を知りました。ここにも露西亞に影響したノルマンの航路を想ふのです。露西亞風に呼べば、*Bjäloe more* と表紙の古い昔の地理書は、反つて新鮮に海の名を教へて呉れました。

時として私は、知覺にも輕蔑すべきものがありはしな

いかと恐れます。何時の日にか歪められた眼を取返さねばならぬ。美のシノニムが直されねばならぬ様に私の帳面の第一頁も正されねばならぬ。おお、春にこそ殘りなく花々よ咲け。あたらしい流れにこそ意力よ滿てと。……

……

かくの如く私は、沸き立つ胸を靜かに海中に收め、沈默を裝はうと試みるのでした。春がきて溫く囁くまで張りつめた氷の下にこの姿を隱すのです。私の皮膚の下の秘密を誰が知らう。まして眞冬の裡を。

Volga

最後に地理の教師の老人の處で鉛筆で記を附した大世界地圖と、マルシェ・デ・ピュース街の古道具屋でドイツ製の古物のコンパスを發見したとき、疑心は最高度に達した

イリヤ・エレンブルグ

カスピ海の鱘魚よ。いつか私は網のあひだに長い吻を挾まれて困つてゐるお前を見た。グッタ・ペルカを嚙んだ牙のごとく悲むべきフモリストの姿！　未だ鱗だけは光らせ青く誇らかに、而も仔魚を從へながら。食卓にのる *Caviar* の背後にはこれだけの挿話が潜んでゐる。

歐羅巴の母、大ヴォルガよ。お前は『婦人の指』と字された高加索の葡萄樹とキルギイスの低地に圍まれ、中部タタアルの集團をすぎて草原の綠に染められ、*Kazan*・*Samara*・*Saratov* を結び、また靜かにヴァルダイの丘を運んで行く。

休息せぬ河流よ。絶間なく土を受取る河口よ。*Begonia* に似た洲はお前の勤勞を語り、時としては汎濫の裡に沈默を守る。正常な胃のカスピ海にお前は與へる。一枚の葉を。葉脈は卽ちお前の一つ一つの分流だ。

氷の中から再び流れを見出すやうに、お前の上にも季節がくる。併しお前を下つて行つた軍艦はどうしたのだらう。それは思ひもよらぬ舊いことで、私のまだ生れもしない西暦千九百四年の夏であつた。アストラハンに待機中と記錄された十九隻のカスピ艦隊はどうしたらう。

Ukraina

大陸のもつ感性はドニエプル河に見ることが出來る。五箇年計畫による新興露西亞は映畫の獨自性を重視する樣になつた。その結果《春》と呼ぶ美しい作品をわれわれに與へた。そこには運動と季節と器物との *Montage* がカメラの機械的訓練の巧さを見せた。

最早水滴は水滴でない。春は春でない。ヴオットカはヴオットカでない。蒸溜器は蒸溜器ではない。*Hurdle* は

Hardle ではない。それ以上の秩序を與へられた明暗の交響樂であつた。以來われわれはホイッスラア以上に注目すべき對象を得た。

Kiev そして *Kharkov*。マス・ゲイムする黑土地帶の人々。脂と汗にまみれた顏。それに重なる次々の顏。均齋のある運動。張切つた四頭股筋。收縮する二頭股筋や、むくれ上る腓腸筋。强く振られる腕々。陰をつくる地面氷解する流れのごとく走る重量。離れ合さるユニフォーム。過ぎてゆく雲脚。夏になる前の若いウクライナ。

靜かなドン河には銅鑼を鳴らせ。稔つた小麥は刈取れ

よ。鐵には石炭を、石炭には火を。人々には仕事をあたへよ。そして常に激しくあれ黑海の水面の如く。

Region of Baltic Sea

Finland

僕らは恒に曙と夕暮を、かたみに感じさせる地球に感謝せねばならぬ。球體を掩ふ襯衣を黑く十八條の線が縱斷する。古きもののあひだに新しく發生する言語。集團を結ぶ意志。

ヘルシンキは石版畫風の植物園と空色十字旗をもち且ラプランドの嵐の胸に生きる極北の首府だ。*Leningrad* 行急行列車。夏になると苔の花咲く曠野を行くであらう。

衣裳屋と化したエリキン氏は曾てこの都市の北方を迂回して東經二十六度線を越えて露西亞に入つた。線路の空隙がなす微かな震動。列車は過ぎてゆく幾つかの驛を日數を。列車のなかのエリキン氏の決意！　その爲に容易に母國から離れることが出來た。

時として故郷をもつ者は禍なるかな。心縛られ同化すべき土地を見出せず虚なる希望のみ滿ちて。落着く家もなく夢を抱いて流れるのみ。エリキン氏は舊き言語を捨てることにより第二の言語を獲得した。

エリキン氏は談じた。眞夏のある日に否定しつつも故

郷の風景を。僕はそれを聞きながら『それも好いだらうさ』と答へた。夾竹桃の花叢の下で、僕らはシャベットを購つた。口の周りを濡して續けざまに喋つた。『夢？』『夢か、それは夢さ。單なる假象の羅列にすぎないのさ』『ざや、君の見る夢は？』『それは無意味な空色の一齣づつのフィルムのやうである』『他に？』『曙の迫るころ夢は音響を伴つてくる。そして寒さも』『さうか』と僕は默つてしまつた。

スオミの子は今靜かに僕の傍から立ちあがる。ほんに奴さん心底まで母國を捨ててしまつたと自負してゐるが未だ未だ、確に殘されてゐる。オーランド諸島のごとく

分配された所謂民族の破片が。

僕はエリキン氏に忠告する、『君の決意は實に驚嘆すべきものがある。若し僕だつたら到底なしがたからう。併し夢に就いては假初にすべきでない』と。君は知らないのか、心理試驗は拷問に價するのを。ささやかな色彩から音響から感覺の程度から、夜の鳥のごとく見張し、これを推理することの可能をば。僕は不圖も君の故郷の湖沼地方に觸れたのだ。君はその頃、かはいらしい少年だつたであらう。

サイマ湖を中心とする北緯六十二度線。手觸り荒いカ

ンバスの布目。綠とコバルト。そのあひだ到る處に翩飜とする國旗。芬蘭風スケイティング。突風のやうに遠ざかつてゆく少年の後姿！

Esthonia

この國の首府にはハンザ同盟の跡も見えぬ。フィンランド灣にむかつて飜へる三色横條旗。風に搖れる風見の鷄。それだけが *Leningrad* からダンチヒ或はハンブルグ航路の汽船を眺めてゐる。

バルト海を横切る *Dotcd line*。三つの島に名附けられた *Osel Gotland Öland*。かつてバルチック艦隊はこれらの島島のあひだを通過しつつ莞爾たるものがあつたらう。自ら

の矛盾を數量によつて晦ましつゝ。聖アンドリウの旗の下に安堵して……

ノヴィコフ・プリボイは私の好きな作家だ。彼もまた戰艦アリヨオルの裡に、これを意識しつつ通過したのであらう。その姿を明瞭に示したのは、對馬と呼ぶ新卽物性文學形式による報告のなかであつた。私はこの種別を疑ふものではない。

戰後の三つの共和國は、あだかも高加索に於ける所の *Armenia Georgia Azerbaijan* に似てゐる。又同じやうに統計は知らず亞麻と大麥を染分けて。その裡を一條の航空路

が劃かれてゐる。それは三つの首府を結ぶ動脈である。

私は時として同化に就いて考へる。言語・民族・風俗に於ける位置は如何に融合させ得らるるであらうか。多角形を球形にするには用法として、唯一つだけではなからうかと。

Stockholm

宇宙に於ける發光體に興味をもつた私は、早速文獻を集めると同時に傍その整理に掛つた。その本に私の手が及んだ時、ステルマア氏撮影のオロラ・ポレアリスを見た。又種類を闡明して行くと、弧狀・線狀・幕狀・帶狀・擴散狀のオロラが宛ら、この都市から發光するがごとき錯覺に包まれた。

思ふに私を魅するのは最早宗教でもない。唯科學に據

る實在への理論の正確さを示す世界だけであると。偶々新聞紙に於て注意させられるのは次の如き場合である。

1、世界動力會議《六月・ストックホルム》2、第十三同國際美術史會議《十月・ストックホルム》……

三つのハルムを持つバルト海沿岸の都市は壯烈な地球磁場に於ける電子屈曲の現象によつて、長く私の腦裡に殘つてゐた。赤地に青の十字旗はマッチ・レッテルの如く新鮮であつた。人は或は言ふであらう！　湖沼の國全面積の九分を占めるのを見給へと。又氷のほか何物もないではないかと。

併しながら美しい北方ベネチャよ。瑞典體操よ。私は五枚の繪葉書を繰返して溜息するのみである。小汽船も尖塔も强靱な鋼で作られてゐるやうに見える。チユウトン族もラップ族も若し君の好きな色で畫いて見給へと言はれたら、私は躊躇なくヴァミリオンを擧げよう。

少年の日、先生は大地圖を擴げて三十年戰役の原因・戰況・結果に就いて詳細な說明を試みられた。私はウェストフアリヤを語感の故に愛し、舌上にかるく弄びながら先きの日を思つてゐた。瑞典王グスタフ・アドルフの出現には、客氣故に譯もなく喝采したものだ。

現實に於て今更宗教に依る鬪爭を眺めることは何等の魅力も持たないのだ。またその必要も認めない私だ。森林業と牧畜業と工業とをもつ國の中央にあつて、冷靜な思考と緊縮感を與へる商業都市よ。私は風景と整然たるリズムを持つ體操を背後に、經濟の上からもう一度見直さなければならないだらう。

歴史的流れの裡に存在する區々たる人物や出來事の問題以上、高空百餘キロに現はれるオロラ・ボレアリスは美しい。ステルマア氏觀測の裡には色彩は少しも見えてゐないが何故か心をひかれるのだ。黑と白とのあひだの情熱と、それを支配する秩序もつ北方の花園よ。

Denmark

There was a willow which grew slanting over a brook,
and reflected its leaves in the stream.

Charles Lamb

雛菊と蕁麻の意味も陸に知らない裡に、*Lamb* に據つて沙翁を覺えた。これが朧げながら私の感じた丁抹國情の概念だつた。そして *Ophelia* の花環が取りも直さず私の頸に掛けられようとした感傷なのです。樹枝が折れたことが彼女の死であつた如く私にとつても、あれを喪したこ

とが正しかつた。

嵐の裡の葉叢のやうに十五歳は早くも私自身を中心とする、教師對教師の爭ひを辨別した。若い集團の裡にあつても、私は恒に一つの立場をもつて或時は心の相似形を求め歪をも正さねばならなかつた。*Copenhagen* が亞爾鮮の葉に、又 *Zealand* その物の恰好をしてゐることを發見する様に……

ハウプトマンは著書に沙翁觀を見せ、希臘を幻想の遊樂地といつてゐた。この考へかたは、人々古文書を見るときにも知らず知らずに捉へられるだらう。博物館・天文臺・病院等ありふれた文化機關のあひだに在るクリスチャン三世大學校に於ける學者の態度は恐らく前者に屬するものとなるであらう。卽ち、幻想と現實と共存する場合、人々は如何なる方向に進路を見出すか?

三叉路と言ふべき *Laaland* は、海上の嚴肅な存在である。宛もサル・ダタントといつた様な海上の位置。若しそこに華手なペリカンや鸚哥を並べたとき靜寂はやぶれ靑綠の單調な島が始めて明瞭となるだらう。私の求めてゐるものも同様だらう。總てのものが隱れてはゐるがそのため反つて眞實が現はれてゐる。

私は半島のホルスタインを見るごとに附け髭(ムスタッシュ)を思ふ。何が私を唆すか。如何なる關聯があるか。これは軌道を外れた車輪のごとく不用意のうちに轉げだしたコミックな球である。時に缺けたものに心牽れるやうに、巧みさから鮮かに轉位する意欲のひとつであらう。

Central Europe

Bohemia

産業圖に大麥と亞麻のみ印されても、黄に牧畜と染められても、この國の硝子は美しい！　磨かれた各の角に太陽は一つづつの位置をもつ。鋭さをもつ空色の娘を手馴づけることは甚だ困難である。

ピッバと言ふ娘を知つたことがある。それは第十六番目の *Hauptmann* の戯曲に現はれてくる娘。上シレジヤと墺地利及び伊太利とのあひだにプラアグを中心とする硝子

工業の存在を忘れてはならぬ。作者のあこがれ！　ブロンドこそ南方を示したものではなからうか。

硝子窯にザラマンデルの如く熱し寒冷の森に硝子の竪琴のやうに慄へる性格こそ、チェック人とスロヴァク人の所有ではあるまいか。*Bohemer*を指尖で辿る時泛んでくるのはピッパである。精巧な花器を見る私の目は、忽ちに櫻酒に似た羞らひに滿ちるのだ。

よく思へ。火花さんと言ひ舞踏を狂熱的と定めたのは*Hauptmann*のポルカ意識ではないかと。私も曾てカタンカ・ポルカと誌した一枚の挿繪を見たことがあつた。その

思ひ出が目前に瞬くのである。

夜更け私の部屋は月光に滿ちる。硝子戸を越えてくる溫度に淋漓たる露の畫くアラベスク。それに戯れて私の消してゆく文字・*Helfriegel*！　指尖にびびびと響くボヘミアンの意識。

Amsterdam

北海に披いた扇よ。お前の裡には秘かに一つの署名が隠されてゐた。春の朝、私はその上を蔽ふ黒いリボンを見附けて謎のやうに驚いた。それ故注意ぶかい寶石磨きがするやうに徐々に黒いリボンを解いてゆくと、下から未だ人目にも觸れぬ海色をした署名が現はれてきた。

變り易い天候のあひだには香料とカンガルゥの夢が仄々と匂つてゐた。砂丘と堤防と低濕地のあひだには運命

的な水準線が劃され、白い頭巾の向ふには季節の花が咲いてゐる。それは縱のある谷隈から風車のある流れ迄。私の皮膚の上には模様を押したセロファンが張られ、幼年を隱すかの如く光滑を見せてゐた。

アレッポの商人ウイリアム・バレット氏は、十六世紀後半の東方貿易に於ける市場に就いて肉豆蔻・樟腦・肉桂・蘆薈・丁字等を、各地方によつて分類して示した。又ある記錄は、十六世紀前半に於ける歐洲胡椒價格の變動に關して香料の重要性を私に敎へた。

いつか私は和蘭帆船と南緯四十度附近での西風利用を

結びつけてゐた。喜望峯からメルボルンに至る五千五百海里。ドイフケン號・エンドラアト號・ライオネス或はリゥイン號の西部濠太剌利に於ける功績よりも、新航路發見のため熱した人間意力のかげをそこに見た。

お前から數多く東邦に來往した船舶は、今私の卓上に俊れた陶器を置いてゐる。マイラン氏・日蘭貿易史。この中には如何程多くの夢をもつた商人でも現實に觸れ考へ直すことの必要なるかを、書き殘してゐる。曾て私の祖父が同じやうに夢を持ち、長崎から買ひ求めたのも、*Amsterdam* 製の陶器だつた。

赤肌の壺に翳が泛べば、陰には壯圖を抱いた祖父像が現はれてくる。幾年祖父は愛玩したのだらうか。併し現實の祖父の肉體を窺ふことは不能である。何時か知れぬまに一冊の草稿と壺のみ殘して去つていつた。『阿蘭陀船と西方の人』を飜せば祖父の指紋と夢が現はれて……

北海に披いた扇よ。お前の裡の署名を指すと胸はいたむ。私の途方もない夢も祖父のやうに消え去るであらうから。二度と書直しの出來ないあの署名は、軈て眞夏の陽に燒かれ秋風に曝され、自ら消えてゆくだらう。それ故黑いリボンは結び直すことは要らぬだらう。束の間の愛惜をこめてその儘に！

Brussels

ある冬の日。僕はジャン・リュルサの地圖を見た。希望ならば見せてもあげよう。それは恰もカラヂユゥムのやうであつた。簡單化された歐羅巴。弧線を描いて北上する三つのB。可愛らしい溫室をもつた中央のB。衣裳に包まれたマッケンジィ！

ここも冬は寒いだらうな。花賣娘は通るけれどマッチを擦つて呉れる娘はゐない。それで何物も現はれはしな

いだらう。お前はそこで小便を長々としてゐるが、世紀はお前を殘して先に行つた事も知らぬだらう。假令平和であるとしても年を取らぬことは怖しい。若し現實であるとしたら何と言ふ悲しい事だ。永遠に死の影が近寄らないならば。

戰爭を經驗してその日その日が無事に濟んだ時、喜悅よりも早く不安の來るのを否みはしまい。集團訓練を受けた僕の上に日々は靜寂を保つて、白蟻のやうに食ひ込んでゆく。叩けど反響のみ。灰色の壁……

朝には馬德里をたつて夕暮にはバルト海に落ちようと

する。振りあげられた運命の骰子。幸・不幸を渡る氣流のやうな時間。僕は流される。僕は瞑目する。しかし再び泛びあがるときを得ねばならぬ。ああ、お前小便人形よ。僕は今こそお前を輕蔑せねばならない！

註　マッケンジイは、と或る街角の傳説に富む童像である。

Deutschland

幼少ジイクフリイトの訓練を受けた中世紀風の空氣が僕の周圍にあつた。歳月が僕を育てていつた。ラインに沈んだ *Nibelungen* の寶が、本當はもつと近い所にあるのだと自覺したのは十年餘り後であつた。現在更にそれを獲得すべき力と年齡とを得た。

また疾走する龍騎兵を僕は好んでゐた。碧紺の上衣の集團が畫集にあつた。目を瞑ると古代の鬪士や騎士たち

が挨拶をした。彼等は何故斯くも麗裝せねばならないのだらうと疑つては見た。併しその理由を得ることは出來なかつた。丁度その頃、ゴシック建築や獨逸文學を三つの森の影響を顧慮せずに調べてゐたやうに。

僕は一つの術策の眞實なのを是認したい。戰役及び爭鬪に於ける服裝の發達史。血に咲ける華。何故なら斯くの如き美麗な扮裝は血潮を隱し、味方に損害を蔽ふことの出來る獨自な方法であつたのだから……。更にこれを裏書する必要があれば、馬德里の鬪牛士の上衣を見るがよい。

Magdeburg の半球の偉力は相對的である。必しも合一した均質でなくてよいのだ。その樣に東プロシヤは波蘭に截斷されてゐても依然として偉力を發し、ポオゼンが無くてもそれは形式にすぎない。民族自決の時、それは油脂となつて離れがたい特性を增加させるであらう。

上シレジヤは *Hauptmann* によつて永久に生きねばならぬ。フランクフルトは *Goethe* によつて。獨逸戲曲のなかに、*Klabund* の存在は距離の觀念を脫してしまふ。より近しい *Stramm* 及び *Werfel* は一層僕を安堵させる。

そして見よ！　ボーゼン湖北岸から、磁性に富む空を目掛けて飛び去りゆく一個の巨體。正確な爆音と調節された速度をもつて。あの下が飛行船製作所。*Friedrichshafen* だ。進路北東――嵐の喝采の裡、軈て實現するであらう *Japan* での夢を抱いたエッケナアがそのなかにゐる。

Poland

斯くのごとき立案も可能であらう。例へば *Sienkiewicz* の作品・シェランカに於ける分析的方法による作家の視角の測定である。私はこの方法を以て、夥しい語句から彼の語彙を整理した。すると彼の背後に隱されてゐた秘密が青空のごとく現はれてきた。

風景のなかには稻妻が位置を占め、寺院はアンジュラスの鐘を知らせた。恍惚たる疲勞のあひだには動物の姿

が鮮明に身近く迫り、私に誇りかに鳴いて見せるのだつた。このカルパチヤ山脈北部から產れた尨犬ブレグは愛らしい恰好をして森を馳けあるいた。

微風にゆれる毛茛やサフランや忘忘草の咲いてゐる高原地帶は長く私に留つてゐた。そのため翅と翅とのあひだを刺された蝶のごとく私は動くことが出來なかつた。腹の赤い蟋蟀が逃げ去つた跡でも、私はその儘だつた。山脈には、軈て雪がきた……

私は透明な空間の美しさを知り、徐々に身動きをはじめた。私を熱狂させたのは *Sienkiewicz* と同じやうに南方の

呼びごゑだつた。千古の靜寂を保つ丘陵や廢墟が潛む血潮を醒ますのだつた。イタリアの太陽に向ひ、虹が描く拋物線に乘つた私は、流星のやうに滑つた。

落下する私を受けとめたのは地中海の波であつた。荒立つ氣配もない常夏の波のなかへ、北から冷靜を學んだ私は言葉もなく沈んでいつた！

Hungary

部分的錄音の効果は、小麥の量を計算させた。大鎌と頭巾をなでる微風。建設のための破壞は、*10 Filler* の切手を思はせる。壯麗なプスタの野。否、さうでないとしても今は何の係りがあらう。エクランに美しい光は約束した。進む未來と過去の夢とを。

曾て地理書をもつたこの手。特色ある三つの《平野・草原・流域》地方。その魅力が僕にアルバムを充塡させ

た。夥しい切手のなかのマジャアル人。映畫の匈牙利的狂想曲。僕は器樂の內容的樣式をしらべた。*OP. X.* リスト作曲。併しあの時これを用ゐてゐたかは知らない。

恐らく錄音としての第一に見た作品であらう。*Ufa* 製作。不幸にして僕は獨逸最大の會社と知りながら、長い間露西亞のウフアの町を想つてゐた。僕の考へは間違つてゐるだらう。若し偶然と世に惡戲の神がないならば。

僕は匂ひを嗅いだ。熟した穀物の量をエクランから。地圖のなかから。そして到るところの人々の間から。それは單なる錯覺だけだらうか。

Tirol

チロルは所藏する袖珍地圖にも少しよりない。例へば *Nord Tirol Alps* 或は *Tirol* として。黑褐色の區分法はこの上もなく暗い。感覺的に見て色調からの他に、言語の意味からも來るのであらう。

久しく正確に言へば、千九百三十二年以來僕は岸田國士氏《チロルの秋》が讀みたかつた。併し現在でもそれを果してゐない。所で數日前、偶々手に這入つた十六枚

の繪——それは所謂 *Picturesqe Landscape* ——の中には、重い石を載せた板屋根と軒下に作つた素朴な花鉢と泉のあるチロルの家庭があつた。

靜かな事は好ましいと言ふ樣な顏をして、お主婦さんが仕事をしてゐる。併し明るい風景ではない。僕は戲曲のなかにもこの樣なお主婦さんがゐて、白い前掛をしてゐるのではなからうか。又家の仕事の外に、ホップを作つたり乾酪をうまく造つたりするのではないかと想ふ。

無知なものに幸福は如何なる姿を示すか？　それは既に《田園交響樂》でジイドが取扱つてゐた題目だが、果

してこのお主婦さんは知性に就いて、死ぬ迄に自己内面の姿を見極めるだけの豊かさをもつだらうか。消えてゆく一條の徑。落葉松林の背後にある *Horn* の照返し。

僕は、かくの如き青い嵐に戰ぐ山村を見ると、知ることに依る苦惱と自己の立場とを反省することが多い。徒に形象のみを見て内部測定の不足した時、如何なる態度が妥當であるか。僕に殘された問題であらう。

Schweiz

サン・サァンズの白鳥を聽いてゐたい貴兄は、多分辻村伊助氏を御存知でせうね。スウイス日記も御覽でしたか。地圖では何と言ふ仄暗らさでせう。佗しい褐色で滿ちてゐる國の湖水は新鮮な感覺をあたへますね。併し貴兄は楯の背後に在る面を否定はなさらぬことでせうね。左様！　と私も御返事いたしたいのです。

作者辻村氏は、文體の裡に俊巖なアルプスの姿を見せ

人々を拒否する峯を記録してゐます。注意すれば、その
ほかにも晩年を指示する宿命觀が見えますね。ジャック
・フェエデの雪崩を見て考へたのですが、確にエクラン
には美しさを約束されてゐても、雪崩自身は浪漫的では
ないのです。貴兄も私も支配される運動の法則よ。正確
な速度よ。

加速度を増加せられた物體の威力を既に再三ならず經
驗した私は山岳地方を想ひました。雪崩に對するこの國
の人はスポオツ以上の切迫した思考を持つてゐて、最早
浪漫的を遊離し去つたのではなからうか。さて困難を意
識しつつ克復するのが新時代の意圖ではないか。總てを

知つてしまつた今の私。

フェエデよ浪漫的ではないかと反問すると同時に、例
へ空しく雪崩の下又は時代の轍の下に身體を隱されても
決して私はその努力が無駄だとは思はれない。この問題
は現實と宗教の關係に似てゐますね。貴兄よ！　目下私
には現實把握より外に道はないのです。宗教に盲された
人は別の双曲線上の存在です。

遠く且遙かな世界にゐたいならば、その儘瞑目すると
よいでせう。併し現在は經驗した意識の存在です。光線
を分析するプリズムの使用を知つてゐる私は、この立場

に於て正しいと言はれねばなりますまい。果して何れが幸福でせうか。私のごとく楯の兩面を極めた時に……

私に與へられた問題なれば自ら解釋せねばならないのです。日々の糧よ、新しき現實よ！　その層に早く慣れねばならないと努めてゐるのは私です。貴兄に御送りするのはこの拙ない記錄です。

Mediterranean Sea

Spain

片や *Basque* 片や *Catalonia*・山脈ピレネエを前に對立する二地方。ウィリアムスのバスクの血と言ふことに、一應は疑問をおかねばならぬ。何故なら母親はポルトリコ產であつたから。以前西領・今は米領なるサンファン西印度諸島の一つ。遺傳學圖式。

馬德里に興味をもつたのは鬪牛のみでなく、畏敬する友の一人が《文明》を書いたから。若かりし年齡の上に

それは微かなペエソスをこめた秋風を知らした。白き腕のかなしみ故に、日夜働くべき機をさがした。アンダルシヤ風の小女の裝ひよりも渇ける心は激しい爭鬪を愛したのである。徒に變る血潮を憎み夜半わが腕に深く刄を刺した。

血潮に染む地圖から年齡はドン・キホーテの如くこの世の姿を靜かに見返す時となり、現實相はわが目から信ずべきものを消し、恢復しつつある傷の上に背くものの美しさを植ゑつけた。わが親しみは父親のなす營みに。心の動きと理解よ。近き父親！　わが父親の目の涙。

片や *Mediterranean* 片や *Atlantic*・わが心にジブラルタルは曙を點じた。われは唯海をおもひ汚れても直ちに靜まる心を願つた。ながき懷疑のあとに會得したのはこれだけであつた。

France

Chalon • Lyon • Avignon

それらはロオヌ河に沿つてゐる。

St. Nazaire • Angers • Tours

それらはロアル河に沿つてゐる。

又われわれの周圍に何と言ふ類似の多いことだ。

偶然の別離は何と言ふ惡戯をするのだ。

森と果樹園と染料會社と機業地とを

悲みの運河は胸飾のやうに結びつける。

記念。それがわれわれに取つて何だらう。

泡のやうに消えた希望は水底にある。

*

慣れ切つたシャンパァニュは

四季の過ぎるが如く平易である。

その間で人は一歳づつ老いて行く。

盆地アキテイヌは一面に綠色に塗られ
ボルドウは蒼い煙色だ。
胸から一本づつ肋骨の外されるやうに
われわれは悲みのメタルを捨ててしまふ。
そして譯もなく新しい暦日を裝ふ。
ピレネエを越えて燕が歸つてくるやうに
片隅に春を用意する。
日々はそれで濟まされてゆく。
怖れを知らぬ人は楡の下で林檎を嚙む。

碎かれた果實の間に硬い種子のあるのも知らないで。

*

夜になるとテラコッタの人形が
生々してアパッシュの眞似をする。
太陽に充分照らされてゐたマロニエが
夕風が來ると不要の葉を墜す。
水を丁寧にやつてゐた窓の奥さんが
草花と一緒に隱れてしまふ。
夜鶯(ロシニヨル)が森の公園で微かな月光を敎へる。
そこにはもう既に優しい霧が滿ちてゐて……

ランプの前を人が往つたり來たりする。
暖爐のなかに勢よく火が燃えてゐる。
新刊書が投げだされてゐる。
お嬢さんの亞麻色の髪が波立つてゐる。
時計が八時を打つ。
退屈の欠伸がかるく唇から消えてゆく。
化粧室で水滴が鳴つてゐる。
生殘つた黒蠅が天井で動かないでゐる。

それは定められた時間と時間とのあひだの平安。
それは又、巨浪と巨浪とのあひだの餘裕。
嵐の前の唯一の靜寂に過ぎぬのだ。

Napoli

友よ、嗤はずに置いて呉れ。このやくざな私の性根をば。風の中の水草のやうに戰慄く私を見棄てて呉れてもよい。爾來クッサンの横に投げ出された、その一節に *Su passeggieri Venite Via* を含む青葉色の小唄本を捉らうとはしない。その故は、汽笛のあとで忍寄る夕闇に似た音樂の類推が私の心を蝕むからだ。

例へて見ると、棚の縫包みの猿等に積つた塵のごとく

今でも負擔となつて殘つてゐる優しい雲の泛んだイタリアの空は、私にとつて眞春であつた。ゲスネリアナ、マレオレンス種の鬱金香やムスカリの花々が咲くときのあるやうに、それは私に與へられた一つの季節であつた。而もその花を摘む餘裕のなかつたことは運命だと諦めて呉れ。

友よ、私は思ふのだが、壁に掛けられたモヂリアニの婦人像がその儘だとしても、匂はしい君の指尖は既に色褪せ、跫音ばかりが恒に躊躇ひがちに地中海から聞えてくる。半島に君の姿は空しく私の地圖は重い。プロキダとカプリの島を君が狙つて興味を感じてゐたころは、牆

にジャスミンの花の萎れる甘い初夏であつた。

最早、寂莫とした林に狂ふ風は秋を示した。急速な落葉のタランテラに對する反作用は、私に *Codenterata* の研究を與へるのであつた。そこには、海の一部から切離された水母が双物の當るまで、永遠の形のごとく硝子皿の裡に横たはつてゐた。その様に私の心の上にも冷然たる季節が遣つてきた。

Sicily

古雅な *Marsala* 酒。シロッコ。郵便切手。パピルス紙。*Sweet Pea* の原産地。更に地中海の色を染めた絹手巾や檸檬と最良橄欖油の販路を求める港。石切場。熱つぽい目附をしたシシリイの女は甘美な母音を響かせる。

長靴と石首魚のあひだに在る航路。凹缺た陸の一部。メッシナよ。人々はお前を『若い花嫁』と言ふかも知れぬ。僕は寧ろお前をエトナある故に、疲れを知らぬ *Iyma*

とさへ呼びたいのだ。

その譯を言はう。希臘の植民地であつたお前。サラセンやノルマンに移つた後も少しも衰へぬお前。今は黒いムッソリニがお前をもつてゐる。美しい町よ。何とまあ地中海は海峽がそんなに多いのだ。

濱田氏が海峽を渡つた時、お前は既に曙のなかに醒めてゐた。それは一昔も前の春なんだが、僕はお前を知つたのだ。浪よメッシナの浪よ！　青いヴィナスの誕生の代りに、今は *Diesel* 船を泛べるだらう。

地中海の風よ。散らすアモールの雛菊の代りに近代型N・Y・Kの旗を見せるだらう。坡西土から奈破里に向ふとき、人々は最早ヘレンの怖れはしないだらう。嬉びの船員はこの上お前を睡らすことを止めるだらう。

そして波の間に間に人々は、をそらく瞥見するであらう。コクトオが *Hortense* を描いたやうに、銀の橄欖や緋色の船帆を張つた沿岸から、秘かに追ひかける一つの影のあるのを。輝しい太陽のあひだの炎さながら……。

Venice

Renaissance に於て黄金色はポッテチェリイの好んだものである。空色の美を知るには飛ぶことの自由さを知らぬ彼にとつて、遠い世界であつたのだらう。それ故樹木のあひだに神々の衣裳を留めたのであつた。

曾て、われわれが働いた圖書館建築のなつた日、壁に百號の《ヴエニス港の朝》が懸けられた。壁繪(フレスコ)風にわれわれがブラシュを把つて唐草模様を描いた東側の壁の上

に。これを見た時思はずホフマンスタアルを想つたのである。丁度、時間が朝であつた許りでなく、その光のなかにティチアンの繪を考へてゐたからだ。分析された光も一元的なものである。われわれに許された方法は、事物を微細に考へ表現は極めて單純化することだ。

水と大理石。車輪や馬蹄によりて
破られぬ、かの靜寂……

とアアサ・シモンズが唄つたが、近代都市と變貌した *Venice* には自動艇の斷續音が聽けるのである。白鳩や古びの附いた石造の家や寺院。また水路。そこらにファシ

ズムの貼紙があつたり、旗を立てた競爭の喚きがあつたりするのは面白い。風景の進化はわれわれのみの思考ではない。

最早夢見ることを許されぬ、睡蓮にも似ぬ水上の都市よ。ギタールと洋燈の釀す情緒は遠く、われわれから離れて行つた。《天上の愛と地上の愛》は曾てはわれわれの裡に存在した。誰がそれを早くも、われわれから奪ひ去つたのか。

Greece

優しい詩人よ。リラの小枝を持つお前の手にアチカの神々は戯れるか。その蜜蜂がお前に既に遅い午後の寒さを教へる。半島を横切つて歸つてゆく牝牛ら。灯の點いたお前の家。雛菊は牧場にアネモネは家路を飾る。白い空のランプ。アルバニアの峰。西北風が吹く。花々はゆれる。

優しい詩人よ。圓柱に繞きつくアカンサスの蔓のやう

に、お前の心臓は一匹の執拗な蛇を卷いてゐる。お前の衣裳の裏には赤い頭文字が縫取られてゐる筈だ。それは死んだあの女が戯れ印した呪詛の封だ。カルコ風の詩をお前は誰に送つたか。思ひ出のなかに留つてゐる赤い蛇のやうなあの女。

逞しい腕のなかに抱締められ硝子のやうにあの女は死んで行つた。あの女に在つた熱情を誰か知らう。皮膚の下にある炎。氷のなかのエネルギイ。あの女は自らを粉碎してギラギラ輝いて消えていつた。あの女に在つた力を誰か知らう。お前を一度愛したあの女は、お前の肋骨に息んでゐる。永遠に。

優しい詩人よ。もう家に戻るがよい。缺けた石像の腕を再び舊へは返し得ぬ。お前の家には窓掛が下りる。鎧扉の鎖ざされぬ前にお前はなかに這入らねばならぬ。そして恒に愛してやるがよい。己れの力足らず救ふことの出來ぬあの女を。お前が、墓場におりる日まで。

Stambul

ビザンチンの匂ひを殘す寺院。塔や圓蓋の白が見える窓には、美しい模様の織物でも掛けてありさうです。水路もある舊い都市。これは私が *Turquie* の索引によるとき現はれるセント・ソフイヤから泛ぶ聯想です。私のアルバムのなか *Première émission de timbres-poste, 1863* の註の下には、榴彈砲兵や塹濠戰の切手が餘程數を增して居りました。

例へこの水都が國から國へ權益を移したとしても、その姿に何の變化がありませう。人間生活はそれ程簡單ではないのです。政治的工作以上に私は斬新な意匠感覺を保つ旗を愛します。又それ以上の何物でもないのです。赤地に殘された新月と星よ。土耳古自身も安西冬衛氏に第一の知己を得たことは幸福だと言ふべきです。

ドルウデ・フオン・モロを旅愁に發見すると同時に、海峽ボスポロスへの審美眼をもちました。勿論私はシネの本質から悖ることを知つてはゐますが。……ある時同じき女人に就いて、畫家伊東氏は話題を提出しました。眞の美しさは女人三十歳に到つて初まり深味はこの時か

ら現はれると言ふ意見は、氏の立場に於てのみ正確と言はれるでせう。……

夢見るときにも實體を誤つて語るな。現實に於けるその形象を歪めるな。これは私のもつてゐる思考です。美も醜も正も反も一點を中心とする圓周上になければならぬ。私に與へられた總てのものは皆存在の理由をもち、これらを如何にして處理し秩序を保つかが、あたらしく現はれた問題です。それ故、汚れた裏町の犬も亦愛すべき對象となり得るのです。

Bulgaria

聯想は自由にするがよい。リリアン・ギッシュの眼眸のあひだには青いドナウがあると君に告げても、唯笑つて答へて呉れよう。空には燦とした太陽がある。亞麻色のあひだの美しいドナウよ。

これはまたイルリ・ポオラに秋のモン・パリの匂ひがするのと同斷であらう。豊饒な耕地に恵まれた農業國。仕事の濟んだあとではP・一〇二〇五番 *Blue Danube* を聽

きませう。おお、あの流域に。

グラス教授は歐米農業史に、バルカン半島に於ける、*Scientific Rotation Stage* の未熟さを擧げてゐる。黒海の風に洗はれたスラヴ族！　その眼眸には荒狂ふ速い海水が映つてゐる。

惡德に似た空の期待を過ぎる一羽の鷲！　焦茶の翅は動亂を育くんでゐる。目的のため用意された鷲の爪は、南方バルカンの森林中に隱されてゐる。火を放つのは誰の手だ！　風をば待てる手を懼れよ……。

目をミラアジュにのみ任せるな。歡喜と恐怖を廻ぐつて海は鳴るを。牡蠣の光る鋭き根の巖頭は行手にある。帆を收めよ！　假泊のなかに明日をまて。おお、その時こそ日焦けた皮膚の下に鳴る、力量を示す骨の數々。

Western Europe

Portugal

アンダルシヤの平原を侵した *Moors* はグワジアナ河を渡渉してリスボンにも向つたであらう。僕は十字(クロス)を帶模様にした一個の磁器を知つてゐる。その下に書き聯ねた言語が私をモノマニアに化した。

りすぼん・りすぼん・りすぼんて言つた様に五遍書いて御覽なさい。多分、諸君は帆走する波而都瓦爾の商船隊を發見なさるでせう。また諸君は花押判の印肉のあひ

だに鳥銃とコンパスの隱されてゐるのに注意することでせう。

葡人は印度に於ける全勢力卽ち六千人と船三十隻を以てマラツカに來り、慶長十一年卽ち（一六〇六年十月）葡蘭兩國人はここに於て衝突して大海戰となり、葡人は四千人と船二十三隻を失ひ、蘭人は……

《渡邊氏・德川幕府初期の外國貿易》

記錄された家系圖。三百年餘の古びた紙冊。その中に收はれた衣魚の跡よりも多くの年齡をもつた事項。如何

なる物も明るき所で觀ることに依り、又新しく再現されることに據つて魅力を生ずるであらう。印刷の技術はヂャナリズムと結托することで覇權を握るだらう。

Verhoef 指揮の任に當つて、翌年爪哇の番舟（バンダム）に到着し、ここで葡國商船の媽港より日本に赴く由を聞き、部下の二船に、拿捕命令を下し、且つ時宜により、日本に進んで……

《同前文獻書載》

これらの中で、風俗或は政治發展史よりも、記號のもつ明朗なデティルに氣附くものがあるだらうか。僕にと

つては奇聞珍談(アネクドウト)は澤山である。綠色感をもてる言語・りすぼんが大伽藍よりも魅惑をもたせるは何故だらう。

ある日、僕はタホ河と*St. Vincent*岬に注意した。そして思はず『奴さん！　やつてるなあ』と獨言した。偶々その時、僕はエドナ・ミレイと中村正常の本を持つてゐた。正に偶發と言ふべきか。

Ireland

一時は胸を安めた古傳說。鄙びてはゐるが尙優しいイェイツの詩を讀んだ。特殊の選ばれた世界にあつて彼のペンは匂菫菜(にはひすみれ)の如く靜かな芳香を發した。民族の曙のよび聲。併し昏冥はふかい霧となつて雨虎色(あめふらし)にくもつてゐた。

寢椅子の上の玖瑰(はまなす)の花とケルプ。モサダ。ミナレットよ。併し白い蛾はいつまでも流れの上に留つてはをらな

い。夕暮の光が墜ちた迹には、耐えがたい寂寥がくるであらう。あらゆるものはその中に隱され、人々は踏むべき場所すら搜し得ぬ。私も亦、幾刻空しい時間を費したことか。

まことに力弱き者には林檎の影も見えず、手に把る水は徒に零れて年齡の過ぎゆく樣は、かの波紋程に、なげきを撒くであらう。榛の森に現はれ沈む木曜日の銀色の月。オカリナを吹く少年の腕にたはむれるカスリン・ニ・フウリハン。小羊よりも柔和な *Archaic Smile* は常春藤のなかに生れてゐた。

＊

午前のスカッシュの中に人々は何を見たであらう。退屈な歷史のあとに置かれだスカアフから、一羽のミノルカが飛びだした。それは聲高く啼いた。酸味ある絞汁のあひだに人々は正しき認識を得た。

かくて私は《イヴェリン》を讀みジョイスを知つた。神秘な霧は晴れて、卵色の太陽は私にあたらしく青空に輝き渡つた。恥所を掩ふべき葡萄葉は何時しか取り去られ、見慣れた美しい肉體はこの上私に敎ふべき何の術策も持たなくなつたのである。

世界人と結ぶべき正午に到つて、私も立場を發見し、*Sligo*・*Belfast*・*Dublin* の特殊なニュアンスを認めても唯異國趣味に陷ることの危險さを自覺した。人々のあひだに起る悲哀も喜びも限られずして、その間にこそ正しさは在るであらう。

ケルト民族と私との距離は縮められ、その様は飛行船と地上とよりも緊密であり大なる安全度を保つてゐた。ましてこの手の上の一冊の書物！　私の視野。明るい正午の年齢。羽搏き去らぬ鳩の前に、私は自ら知るために頁をひらく。

Scotland

西部の地勢が僕に遣瀬なさを語る。
この國産のウヰスキイを僕は好まない。
カンネのある海岸、泥炭地の中のボンネット。
Quebec に至る航路二六〇〇海里は、*Glasgow* から *North Channel* の霧を通過する。
この中で誰が歌ふか。
綠の上衣は華手ではない。
寧ろ僕は緋紅色（カアマイン）のヂャケッがよいのです。

海豹のごとく休息してゐる *Minch Channel*
のレウイス島は靜寂である。
モノクルを手にした紳士は三等船客の名簿にない。
サンドウキッチ型の帆船が移動してゆく。
Sa'ad 油を貯藏してないプリシデントがある。
サナより効果のある遊歩甲板は反つて曇つてゐる。
コンメンメの波が打つてゐる
北方の島はつまらない叢書(シリーズ)のやうに並んでゐる。
スチュワアドが多忙であるとき
匂ひは食用鳩のやうに脂肪に富む。
Mulatto の水夫たちが鼻先に前の港を泛べるが
つまり女達しか判然としない。

郵便飛行をするフオッカアが
品のよい海泡石のパイプのなかに這入つてくる。
そして再び煙の上に翔け出してゆく。
紳士が船室に消えてそこにハバナの匂ひ。
空は一枚の青いハンカチ。
午後三時。

England

人は現實その儘受取ることを喜ばぬ。流血の上に假裝されたお前の名よ。時として靑銅砲にロココ風の模樣を軍艦には女皇の稱號を、サルムソンには愛人の名を。

紅白薔薇戰役は花祭ではない。星室廳は天文臺ではない。華麗な名は怖れねばならぬ。

綠色の *Dover Strait* も僕にとつて何物でもない。更にクロムエルもネルソンも。ここに少し許りの價値がある。卓上の冷性な秩序。バアミンガム製の鋼鐵ペン。僕に書かれるために置かれてゐる。

花は花を。小鳥は小鳥を。海は海を。光は光を。人は人を。機械は機械を。空は空を。

まして崩壞期のお前はお前を。各その職能を果さねばならぬ。無敵艦隊を越えた名譽の十六世紀。制定されたお前の旗ユニオン・ヂャックが世界の港に飜らぬ日がきても。せめて一個のペンに赫しい署名をして。

Iceland

北極圏に接する大島嶼！　大西洋と北極洋の水を分けて、偶々思ひがけぬものに出會つて發するブラヴォを私に言はせる。

氷河と間歇泉は組合せ文字の如く存在する裝飾風の意匠である。全島を彩るのは火山岩の赤。これは宛ら雪のなかにある園生の葩とでも言つたやう。

綠の島（グリーンランド）に至る二四〇粁。海には氣儘な魚を走らせて私の夢を落著けようとはさせない。濛氣と裂帛の響をあげる氷河の末端からするすると柱頭にあがるのは十字旗である。

アイルランド僧とガルダアル。次いでノルマンの建てた都市・*Reikjavik*！　時到れば牧草の穗は搖れる。紫に馬鈴薯の花は群がる。時のみぞ知る、それ以上の何物もない。

Norway

砲口にも煙。水面にも煙。狙ひ上手な砲手は、一本の銛をも粗末にしない。浮ぶ巨體。背部に止つた銛は致命傷の楔である。跳ねあがる波浪のなかに刻々と、動物は死に出發するのだ。

さて友よ！　記憶しなかつたか。壁の大地圖のなかに微かな水音のしたことを。それは或秋の夜半で、月光が窓から六十度近く斜影を與へてゐた。部屋の壁に少しま

せられた青。慄然として私達がその部屋から出ようと思つた時、集中光線（すぽつとらいと）となつた月がスカンヂナヴィヤを照してゐた。

とある地理の時間であつた。私達はリアス式海岸に沿ふて南下した。峽灣。鯡の群れ。明暗の懸崖。又、片手に鉛筆をもつた私達はサインした。*Tondhjem* • *North* • *Sogne* • *Hardanger* • *Bukken* に向つて！　そして私達も既にアルネを讀んでよい年頃になつてゐたのであつた。あれから幾年になるだらう。ああ積むは埃よ！

鯨は解體せらるるであらう。一沫の朱を海に印して。

忽ちに搔消す波。ああ！　汽笛は港に哀憐なひびきを傳へるであらう。飾られた多くの經濟地理學への參考資料と圖表、機械類はどうなるのだらう。まして教師の二十年の努力こそは。

Memorandum

Ni vu ni connu
Je suis le parfum
Vivant et défunt
Dans le vent venu!

Paul Valéry

Toshihiko Sugimoto

西暦千九百三十二年十一月の晴れた朝、私は田舍暮しの日課に從つて讀書してゐた。其後佐藤一英氏と會談して殆んど夜を明かさうとした記念すべきあの部屋からは荒凉たる田園の一部が見えた。靜かだつたので日溜りを求めて飛ぶ黑蠅や密蜂の翅音にまじつて、噴井の呟くこゑが聞えてきた。――丁度、その年は第二詩集を出したので知人を捜す用務の傍、上京して、佐藤一英氏宅竝びに村野四郎氏宅に在り、九月近くに歸つてきた。

誰もが感ずるであらう完成の後に來る言ひようの無い氣持を、私も味はつてゐた。卽ち直後の疲勞と共に更に次期への展開に對する責任的な焦心だつたので、絶え絶えの水音にも無關心では居られなかつたのである。加ふるに、第三詩集の腹案成り、豫告してしまつたので一層激しく身に迫つたのは當然だつた。

*

第二詩集は改題以前《液體》なる名をもつてゐた。それに對して芒江大漁先生――恩師鈴木榮太郎氏が次のやうなお言葉を下さつたのである。

私は駿彥の詩を芽生えの時からずつと眺めて來た。どんな
小さな飛躍にもどんな小さな轉向にも私は心を愕かして來
た。《液體》は今までにない大きな飛躍と轉向の到來を豫告
して居るやうだ。《液體》はまだフラスコの內にぢつとして
居るがギラギラして來たぢやないか。フラスコの外に何か
光り出したものがあるらしい。

自ら反省するところがあつたので、その後筆を措いて風俗史の讀破を初めると同時に、

科學に對する熱烈な氣持の興るに從ひ、專攻した《*Physikalische Chemie*》の研究に再び身を投じたのである。

學窓にあつた時、私は伊藤半右衞門先生に指導を受けてゐたが、卒業後職業の關係上、自然に遠ざかつてゐたので、復舊のためには人知れぬ苦勞を嘗めた。これは今から考へると、決して無駄をしなかつた譯で、絕えず背後に在つて留意して下さつた化學科の諸先生に恒に感謝してゐるところである。

私はアルレニウス氏の《電離說》を讀んだり、それから導入される化學工業に就いての知識を整理したりしたのであるが、就中、イオン特有の色や電離の平衡及び解離度を調査した。從つて酸性アルカリ性に關しても、相當に注意を拂ひ、何れも實驗の機會はまことに少ししかなかつたけれども文獻上からは考慮の中に入れてゐた。溶液に於けるイオンと同樣、單語が文章から分離した場合の機能の測定に野心を抱き初めたのは、この頃からである。東京帝大の久保田勉之助博士編《*The pratical Methods o Chemist.y*》を座右にしたの

も一用意であつた。

＊

文と呼ぶものの成立に就いて、木枝増一先生は二條件必要説の裏書としての、*Henry Sweet* の文典を擧げて説明され『單語の結合』といふこと、纒つた思想を表してゐるといふことにそれを屬せしめてゐる。

私は同氏著《高等國文法講義》を屢々利用したので、何等かの方法で、自分の保持する或種のフヮンタスティックな世界を、自分の語彙の範圍に於て構成したいものだと思考し始めたのである。たまたま一枚のジヤン・リュルサ描ける歐羅巴地圖を見た。これは線を有効に使用した好例と言ふべきであらう！　次に見たのが歐羅巴航空地圖であつた。

其他、種々の文獻にも觸れたのであるが、素材の分解と構成にあたつては私の感性がこ

れの選擇に作用し、方法に於けるは私の曾ての科學的訓練の應用であるに外ならない。

＊

アンドレ・ヂイドが《*Les Faux-Monnaye rs*》を千九百二十六年に發表した後、《*Journal des Faux-Monnayeurs*》を示したことにも、私は深く心を牽れてゐる。唯一の髓筆集となるであらう《海と森の石像たち》が出る時があつたら、私はそのなかに構成に關する準備・方法・態度を明白にしたいと思ふ。

斷る迄もなく、私は《*EUROPE*》は無自覺的に製作してゐないのであるから、異層の人々から種々なる非難のあるのは覺悟してゐる。前提した如く極めて野心的な意圖が存在したのであつて、實はこれは一つの更に展開するものの爲に用意した *Prelude* である。

私は日本に甚大な影響を與へた歐羅巴文明の存在を忘れては居らぬ。價値を正しく認識

する者にとつては、充分に觀られるであらう。先づ知ることが理解への道の第一歩である
と考へて、厖大な姿の片隅に辿りついた。

*

*

Emeline, Emmeline, Emily,

言語は有機體である。これを死滅に導くも或は生かし得るも、其人の技術によるのであ
る。私はそれ故、テクニツクの問題を等閑には附して居らぬ一人である。
最近は不足を補ふために進んで《國語科學講座》を學ぶと同時に、詩人の語彙の研究に

も從つてゐる。前掲したもの三つは同じであるが、それだけで看過されぬものを包含して
ゐるやうに思ふ。
《*EUROPE*》に於ても、この點は重視した。
尙述れば、記錄にもある點まで正確さを保持させるやうに努めたのである。私の思考上
科學的訓練の影響の他に、畏兄笹澤美明・村野四郎兩氏の教示して下さつた《新卽物性文
學》のことを忘れてはならぬ。兩氏の手ほどき無ければ武田忠哉氏著《*DIE DICHTUNG
DER NEUEN SACHLICHKEIT*》も理解し得られなかつたであらう。この他、同樣なこ
とが小林武七氏、竹中久七氏、山岸光宣先生に就いても言へるのである。
お互に見解の相違はあるから、ある範疇も生じ得るのが當然すぎる位である。型拔器で
押出されたときの悲哀を私は秘かに考へて見た。群が、一仕事をするときに於てはこれも
妥當であることは分る。併しアンデパンダン風な集團であると言つた場合にはその慘慄さ
は目に見える樣である。この邊の問題に關しては尙考へ得べき餘地があらうと思ふが私は

斯くなる場合には署名を當然すてるのが正しいのではなからうかと信じ得た。

今や《*EUROPE*》完成し、第三詩集は終に場所を讓らねばならなくなつたのである。が遠からず山中散生氏に依つて選ばれた《*Le chien pompéien*》は第四に現はれるであらう。第五に位置するものは、私の一生の仕事としてもよいと自負してゐる。

それには民族學・土俗學の背景が必要であると共に、もつと日本の進むべき方向を考察し、日本語の美しさに慣れて、根本的に私の精神が鍛練された日から、仕事は始まるであらう。曾て日本に於ける祭禮・埋葬・忌に關して、これらを含む《日本農村社會》の特殊な層を研究され、內地はあまねく最近では、滿洲・朝鮮迄も調査を完了された芒江大漁先生が、氏神の豐富な資料に滿たされた部屋で私に次のやうに談話された。

『そこで、以上の事項を思考しようとするには、從來の哲學樣式では飽足らない所が認められる。また記錄方法に於ても、今後は俳文のごときものか、詩の表現をとらねばならなくなるであらう！　それは眞實である。

日本人の歐米人と相違するのは、概略的に思考の點のみ見ても、前者の飛躍的哲學的であるのに比して後者は漸層的推理的である。言をかへれば詩的感情的であるのが前者であり、理知的散文的なるものが後者であらうと思ふ。目下哲學は一つの行詰りに遭遇してゐる。打開する途はどこにあるのか。これは眞に至難な問題となつて殘されてゐるものであるが、進路として見られるは《勘の研究》の如く、日本人的思考故に成立したものでなければならない。』と結ばれたが、私は暗示を多く得た。

*

《朽葉以後》は思つたより遲れたけれど、俊れた詩人を研究するには一層慎重な態度と用意とを必要とする。資料を尙集成し、完全なものにしたいと念じてゐる。

最近、私は色々な點で《日本》には實際隱れた美しいものが存在することを見出した。その一例は《墓地》である。好條件に依つて俊れた戒名の出來ることは知つてゐる、それを問題にして騷いでゐる連中からは私は遙かに遠い！　又、墓碑の大小に依つて階級性を取上げてゐる連中からも私は遙かに遠い！　それらは私にとつて實際幼稚な思考としか思へないのである。卽ち、私には今日それらの問題はあまりに小さすぎるのであり、最も重要なのは自我意識の確立であつて、取りも直さず、これは自分の信念といふ問題になる。

私は、單なる國粹主義の舌端に踊らされてゐるものでもない。日本語の研究を進めて行けば行く程、自我意識は烈しくなつてくるのであり、それを助ける資料が次々に發見されるのである。と言つて決して、時代的な所謂切の類でもなく、古寫本の類でもない。

ならば、兒童語中に發見し得るものであるかと言ふに、矢張り『ノン！』で答へねばな

らぬ。併し私とても總てを否定し去る譯ではなく、具體的に言へばこれは反つて人知り過ぎるが故に看過してゐる《記錄》中に存在すると言つてもよいと思ふ！　それで《時代文化集成》を見たり、正に磨滅せんとする墓碑から安永・寶曆の年號を見ると、時代の姿が冷靜な記錄の下にある樣に思ふのである。

《EUROPE》は漸く龜山巖・天野大虹・坂野草史・山中散生諸氏の御盡力によつて、市に出ることとなつた。岩佐東一郎・城左門兩氏の御世話も亦わすれがたい。

尊敬してゐる芒江大漁先生の案によつて扉の文字は選ばれ、資料に關しては恩師化學科長小瀨伊俊先生から承る處また多い。印刷に關しては長良川舞踊研究所主事岩間純氏の紹介で、西濃印刷株式會社岐阜支店營業部長大野加牛氏を知り專ら御世話になつた。

上梓されるに際し、御後援御指導下さつた方々に厚く謝意を述ぶる次第である。

CONTENTS

European Russia

Ural 7
White Sea 11
Volga 14
Ukraina 17

Region of Baltic Sea

Finland 23
Esthonia 28
Stockholm 31
Denmark 35

Central Europe

Bohemia 43
Amsterdam 46
Brussels 50
Deutschland 53
Poland 57

Hungary 60
Tirol 62
Schweiz 65

Mediterranean Sea

Spain 73
France 76
Napoli 81
Sicily 84
Venice 87
Greece 90
Stambul 93
Bulgaria 96

Western Europe

Portugal 103
Ireland 107
Scotland 111
England 114
Iceland 116
Norway 118

Memorandum

意匠　亀山巖

効果　天野大虹

助草　坂野史

校訂　山中散生

同じ著者に依りて

暦と地圖	昭和五年五月・東文堂
記號と秩序	昭和七年九月・旗魚社
EUROPE	昭和九年六月・青樹社

*

*

朽葉以後

Le Chien Pompéien

海と森の石像たち

Le Cimetière Japonais

詩集《EUROPE》畢

EUROPE

昭和九年五月五日印刷
昭和九年六月十日發行

初版百部　定價壹圓

著作者　岐阜市多賀町十九番地　杉本駿彦

刊行者　京都市東山區八坂通大和大路東入　天野隆一

印刷者　岐阜市七軒町十二番地　西濃印刷株式會社　岐阜支店　河田貞次郎

刊行所　京都市東山區八坂通大和大路東入　青樹社